

《研究ノート》

## 日本語文献から見た「ドイツ牧舎」(徳島板東) 指導者クラウスニツァー

松 尾 展 成

- (1) 青島捕虜・板東収容捕虜の職業構成
- (2) 板東町「ドイツ牧舎」の創設
- (3) ドイツ牧舎の指導者クラウスニツァー
- (4) クラウスニツァー帰国後のドイツ牧舎
- (5) 引用文献目録

### (1) 青島捕虜・板東収容捕虜の職業構成

1915年に俘虜情報局は青島捕虜の職業調査を実施した。この調査の目的は、「獨逸人ノ東洋ニ於ケル經營狀態ヲ知ルコト」, 「獨逸人獨特ノ技能ヲ利用シテ國産上ノ傳習ヲナサシムル爲メノ參考ニ資スルコト」, 「俘虜ニ勞役<sup>(1)</sup>ヲ課スル場合ノ參考ニ供スルコト」の3点であった<sup>(2)</sup>。

15年1月現在のこの調査<sup>(3)</sup>によれば、青島捕虜は12収容所に合計4,461人いた。そのうち、現役軍人軍属以外(これを以下では、正確ではないけれども、予備役と総称する)が合計11百人余りであり、予備役は捕虜全体の25%を占めていた(この統計および俘虜職業調査1917において、予備役の将校・准士官の数は不明である)。予備役の職業とその人数は官公吏185人(予備役の16%)、「宗教・技術家等」161人(同14%)、商業503人(同44%。うち貿易商241人)、工業167人(同15%)、農業12人(同1%)、「其他」111人(同10%)であった。しかし、「宗教・技術家等」の中には技師(電気21人など)が含まれていたため、工業関係者の実質的人数・比率はさらに増加するであろう。

青島捕虜のうち、現役軍人軍属は33百人余りであり、捕虜全体の約75%を占めていた(軍属は僅か5人であったので、以下では現役と略記)。その中で、将校・准士官は合わせて250人(現役軍人の8%)にすぎず、大部分の30百人余り(現役軍人の92%)は下士卒であった。また、同じ調査の「現役下士卒本業調査」によれば、現役兵の本業、すなわち、徴兵される前の職業は、官公吏42人(現役兵の1%)、「技術家等」201人(同6%。現役兵には「宗教家」はいない)、商業286人(同9%。うち貿易商27人)、工業1,678人(同54%)、農業272人(同9%)、其他649人(同21%)であった(一部の収容所の准士官が下士卒に含まれたので、合計は現役下士卒のそれと一致せず、31百人余りになっている。しかし、重複は極く小さい)。しかも、上記の現役下士卒本業の「技術家等」は、技師(機械8人など)、技手(電気19人など)を含んでいた<sup>(4)</sup>から、工業関係者の人数・比率はさらに高まるはずである。また、現役兵の本業における農業の比率(9%)は、予備役のそれ(1%)よりも遥かに

高い。

青島捕虜全体に占める比率を求めると、現役の将校・准士官は6%に達しない。上記のように一部に准士官の重複を認めたくえて、現役下士卒の「本業」および予備役兵の職業の割合を計算すると、官公吏227人、5%、「宗教・技術家等」362人、8%、商業789人、18%、工業1,845人、41%、農業284人、6%、其他760人、17%となる。

ところで、1907年のドイツ帝国国勢調査では、総人口に対して農業は29%、工業は43%、商業は13%であった<sup>5)</sup>。この統計の職業区分と青島捕虜統計のそれとの差違を、乱暴ではあるが、無視すると、青島捕虜全体に占める農業関係者の比率は、帝国全体よりも遥かに低かった。また、全捕虜に対する工業関係捕虜の比率は、帝国全体よりもやや低いが、予備役および現役中の「技術家」に含まれた各種技師・技手を加えると、かなり高まるであろう。商業の比率が帝国よりも高いのは、予備役中に多数の貿易商が含まれていたことによるであろう。

なお、滞在地と考えられる「職業地」を見ると、捕虜全体で青島3,282人（現役軍人2,991, 予備役291）、その他の中国848人（現役軍人279, 予備役569）、日本116人（現役軍人3, 予備役113）、その他215人（現役軍人49, 予備役166）となっていた<sup>6)</sup>。

四国の3収容所を見ると、牧畜・酪農関係者は予備役ではまったくいなかった。現役下士卒の本業として、徳島収容所に1人（搾乳業）、丸亀に4人（搾乳業1, 牧夫3）、松山に2人（いずれも搾乳業）が記録されていた<sup>7)</sup>。本稿のクラウドスニツァーは、現役兵であり、上等兵（一等兵）であった、下士卒に含まれたから、丸亀の4人のどちらかに記帳されたはずである。

第2回目の「俘虜職業調」は17年4月に実施された。その時、職業分類大項目が変更され、15年の6類が7類となった。「宗教及技術家等」が17年には自由業と「技藝家」の2類に区分されたからである。また、商業は17年には商業及交通業に替わった。

17年の9収容所（静岡、大分、福岡を含む）の捕虜は合計4,651人であった。そのうち、予備役は13百人余り（全体の28%）であった。その内訳は官公吏193人（予備役の15%）、自由業52人（同4%）、商業・交通業597人（同45%）、農業22人（同2%）、其他28人（同2%）であった。ただし、15年の工業は167人（15%）であったが、17年の工業は45人（3%）に激減した。15年の「宗教・技術家等」は161人（14%）であったが、17年には、「技藝家」が機械88人、建築37人などを含むことになり、390人（29%）に激増したからである。このように分類大項目が変化したので、この「工業」の比率をドイツ帝国国勢調査の工業人口比率と比較することはできない。これは以下の「現役下士卒本業調」についても同じである。

17年の現役は33百人余り（全体の約72%）であった。「將役（校）」・准士官は15年と同じく現役軍人の8%であり、下士卒は3,062人（現役の92%）であった。同調査の「現役下士卒本業調」（ここでは現役下士卒の合計は2,118人とされている。これは誤植であろう。以下の比率は、上に挙げた、現役「下士卒」合計3,062人に対するものである）においては、官公吏18人（現役下士卒の1%）、「技藝家」1,969人（同64%）、商業・交通業255人（同8%）、工業121人（同4%）、農業370人（同12%）、其他385人（同13%）である。機械238人、海員184人、鑛山132人、錠前工114人などを含む「技藝家」は、圧倒的であり、工業は、予備役の場合と同じように、激減した。

板東収容所を見ると、捕虜953人のうち、現役が519人(全体の54%、このうち将校・准士官は44人[現役の8%]、下士卒は475人[同92%])、予備役が434人(全体の46%)であった。したがって、板東では現役の比率が全収容所の捕虜合計よりも相当に低く、逆に、予備役の比率が高かった。また、予備役の職業は官公吏50人(予備役の12%)、自由業17人(同4%)、「技藝家」91人(同21%)、商業・交通業241人(同56%)、工業16人(同4%)、農業8人(同2%)、其他11人(同3%)、合計434人であった。「現役下士卒本業」では、官公吏3人(現役下士卒の1%)、自由業0人、「技藝家」292人(同61%)、商業・交通業38人(同8%)、工業26人(同5%)、農業53人(同11%)、其他68人(同14%)、合計480人であった。

板東に牧畜・酪農関係者は予備役ではまったくないなかった。現役下士卒の本業として、6人(搾乳3, 牧畜3)が記録されていた<sup>(8)</sup>。本稿のクラウスニツァーは搾乳か牧畜のどちらかに分類されていたであろう。

ここで視点を変えて、板東収容所印刷所の定期刊行物、『バラック』の記事、「われら板東人<sup>(9)</sup>」を見てみよう。同記事は、19年初めの板東収容所の捕虜1,019人をまず現役軍人55%、予備兵45%に区分している。しかし、将校・下士官は10%に達しなかった<sup>(10)</sup>。将校・下士官以外の捕虜は、現役兵か予備・後備・国民兵(本稿では予備役に一括されている)であった。板東収容捕虜の最大部分は、上記記事の分類表において「種々な職業」としてまとめられている業種に従事していた。その業種は、機械・金属加工、食糧・衣料・その他生活必需品、建設関連、農林業、交通・運輸、などを含み、人数は全体の51%に達していた。第2位は、貿易を含む商業で、人数は全体の30%を占めていた。その他の人々は工場労働者(5%)、自由業(3%)、官公吏(2%)であった。上の農林業57人の中で、農業(農場)・菜園を除いた「その他」は、14人にすぎなかった<sup>(11)</sup>。この14人の中にクラウスニツァーが含まれていたはずである。

(注1) 捕虜の雇用・使役に関する状況を全体として見てみる。俘虜労賃表 1920は、捕虜が取得した賃金と、労役に従事した人員を、収容所別に合計数で表示している。しかし、この表の収容所には、四国に丸亀、松山と板東があって、徳島はないのに対して、東京と習志野、姫路と青野原はそれぞれ一括されている(したがって、徳島は板東に加算されている可能性が高い)。また、収容所の存続期間や収容人員も顧慮されていない。それらを度外視して、本表を概観すると、全収容所で得られた賃金総額(約728億円)の約65%は、名古屋収容所のものであり、久留米の約17%がそれに次ぐ。10%弱の板東は第3位であった。第4位の東京・習志野は3%に達しないし、松山と丸亀は合計しても0.5%に達しない。それに対して、延べ人員では東京・習志野が第1位で、総数(約465百人)の約24%を占め、約22%の板東が第2位であった。それに近いのが、約21%の久留米である。名古屋は人員では17%に達せず、第4位である。松山と丸亀は合計しても、延べ人員の1.5%に達しない。とくに、丸亀の金額35.7円、人員119人は13収容所中、桁外れに最小であった。松山と丸亀の両収容所は、いわば地元から隔離されていたわけである。

個別事例を見てみると、捕虜約100人を収容し、18年に閉鎖された静岡俘虜収容所は、日本の収容所を視察した米国大使館員(松尾 2002 a, 第3節参照)によれば、標準的な収容所であったが、ここから衛兵の護衛付きで所外に出張する捕虜は、閉鎖直前に製パン工1人にすぎなかった。林 1993, pp. 12, 51. ただし、俘虜労賃表 1920では静岡の延べ人員は約35千人に達する。徳島収容所の20人は16年に徳島市で蒸気機関の補修などに従事した。林 1982, pp. 27, 29. さらに、鳴門教育大学 1990, p. 88; 瀬戸 1999, p. 118を参照。久留米収容所では17年11月から18年3月まで、延べ下士官651人、兵卒13,057人が陸軍演習場のための基礎工事に従事した。久留米収容所 1999, pp. 18, 32. 捕虜の「労役」の点から見ると、「全国の収容所の中で一番の稼ぎ頭は名古屋の収容所」であった。約500人の捕虜のうち約170人が市内の鉄工所、染色工場、陶器工場で毎日働いた。富田 1991, pp. 22, 60.

(注2) 俘虜職業調 1915、「俘虜ノ職業調査表二就テ」の第一.15年のこの小冊子の表紙には、第2回調査と異なって、発

行年月が印刷されていない。しかし、第1に、本文の冒頭の「俘虜ノ職業調査表ニ就テ」（ページ数は付けられていない）は、「本表ハ左ノ目的ヲ以テ一月十日迄内地ニ収容セル俘虜…ニ就キ其職業ヲ調査シテ調製セルモノトス」と、書き出され、その後には調査の目的、成果の要約などが記されている（この文章は基本的には17年調査表冒頭の「俘虜職業調査表」と同一である。けれども、後者は1ページから始まる）。第2に、この小冊子に収められた各統計表の右下欄外に「四、一、一〇現在調」と記載されている（なお、捕虜総数はp.4で4,461人とされている。後述参照）。以上の2点から、これは15年調査と判断できであろう。——この職業調査に関連して、鳴門市史 1982（p.740.その典拠は示されていない）は、15年4月21日に俘虜情報局は、「俘虜の特殊技能者を以て本邦工業に使用すれば相当の効果を挙げ得るので、俘虜の特技を調査した結果、つぎのとおりであった。使用希望のある業者は、5月30日までに申し出るよう取り計らわたい」と、公示した、と記している。特殊技能者440人の中で最も多いのは、指物師101人で、次が電機工85人であった。他に腸詰製造業40人、乾酪製造業20人などもいた。これらの数字は、学歴別に編成されており、すべての収容所の合計数であろう（15年と17年の俘虜職業調は収容所別に集計されている。そして、その一部分である「現役下士卒特業調」の「特業」者は、15年に321人、17年に440人である。しかし、いずれも腸詰製造業と乾酪製造業の項目を含まない。俘虜職業調 1915, p.9; 俘虜職業調 1917, pp.15-16を参照）。また、才神 1969（pp.165-166）によれば、「俘虜四千四百六十一名中、技術を有する者が数十名おり、なかには電信技師や職工も少なくない、その技術を習いたい者は、所轄の商業会議所を経て俘虜情報局に申し込むように」と、当局は「二月に入って」公表した。著者はこれの年度を明らかにしていないが、15年のことであろう。ここに記された捕虜の総数が、俘虜職業調 1915の捕虜総数と一致するからである。さらに、林 1982（p.137）、林 1993（p.36）と棟田 1997（p.88）によれば、俘虜情報局は、「コノ度ノドイツ俘虜ノナカニハ、学者技術専門家ナド少ナカラザルニツキ、ソノ指導ヲ受ケント欲スル向キハ、所轄ノ商工会議所ヲ經テ、ソノ旨俘虜情報局ヘ申し出ラレタシ」と、布告したとされている。しかし、この布告の時期も3著書において明示されていない。

(注3) 15年および17年の貴重な統計表を私は瀬戸武彦教授のご厚意により読むことができた。

(注4) 以上、俘虜職業調 1915, pp. 1-4, 10-14（なお、職業大分類の下位の小分類項目は、予備役の場合と現役下士卒の場合とは異なる）。さらに、才神 1969, pp.165-166; 富田 1991, p.99; 瀬戸 1999, pp.117-118を参照。

(注5) Jahrbuch 1915, S. 19; Jahrbuch 1923, S. 10.

(注6) 俘虜職業調 1915, pp. 5-8より。ただし、17年調査の「地方別」人員はいくらか異なり、合計で青島3,068人、その他の中国1,054人、日本128人、その他401人となっている。俘虜職業調 1917, p.13.

(注7) 俘虜職業調 1915, pp. 4, 13. なお、徳島、丸亀、松山収容所の現役と予備役との人数を比較すると、165対41, 167対157, 178対239であった。俘虜職業調 1915, pp. 1, 4より計算。これから見ると、徳島は現役が断然多く、丸亀はほぼ同数、松山は予備役が多数を占めていた。したがって、この点からすると、3収容所は、現役・予備役の比率の違い、それによる年齢の差違など、その性格をかなり異にしていたであろう。さらに、15年の徳島、丸亀、松山の予備役の職業および「現役下士卒本業」は、俘虜職業調 1915, pp. 1-4, 10-14を参照。——14年末の徳島収容所捕虜、約200人中の123人の職種については、鳴門教育大学 1990, p. 79を参照。収容所新聞、『陣営の火』に発表された、16年の松山収容所捕虜中の現役・予備役の数、現役兵・予備役兵の職種については、富田 1991, pp.230-231を参照。

日本を「職業地」とした捕虜は、青島捕虜全体で116人（15年）あるいは128人（17年）であった。俘虜職業調 1915, p.8; 俘虜職業調 1917, p.13.それに対して、松山収容所のそれは39人あるいは42人であった。才神 1969, p.129; 富田 1991, p.233. この数値を単純に比較すれば、かつて日本に居住していた青島捕虜のうち、約1/3が松山に収容された計算になる。開戦前に日本に滞在していた、徳島、丸亀、板東収容捕虜の数は不明である。

(注8) 以上、俘虜職業調 1917, pp. 3-7, 17-22. なお、板東の「現役下士卒本業」の合計480人は、「備考」によれば、「准士官五名ヲ」含んでいた。

(注9) その中の所属部隊別、出身邦別統計の主要部分は松尾 2002 a, 第4節（注2）で紹介した。

(注10) 17年の「俘虜職業調」から見た、板東収容所の現役・予備役の数、現役中の将校・下士卒の数は本文で言及した。ただし、18年の日本側の一統計によれば、板東収容捕虜の階級別人数は、将校・下士官合計246人、兵卒767人、文官など15人、合計1,028人であった。富田 1991, p.47; 林 1993, p.41. それから計算すると、将校・下士官の比率は24%, 兵卒75%となる。

(注11) 以上、鳴門市史 1982, p.767; 富田 1991, pp.98-99; 林 1993, p.28; ドイツ館 2000, pp.22, 26-27. ——富田製業 1992（p.88）は、板東収容所には特殊技能保持者として腸詰製造業者40名、乾酪製造業者20名がいた、と記している。しかし、この数字は、本節（注2）鳴門市史 1982（p.740）の引用であろう。第1に、両者に該当する分類項目は、上記『バラッケ』記事には、ない（製肉は13人）。第2に、俘虜職業調 1917（pp. 7, 21）によれば、板東にいたのは、予備役では乾酪製造業1人だけ（腸詰製造業は0人）であり、現役下士卒の本業としても腸詰製造業が1人だけ（乾酪製造業は0人）であった。

## (2) 板東町「ドイツ牧舎」の創設

板東収容捕虜が種々様々な技術・技能<sup>(1)</sup>を持つことを察知した徳島県有志は、捕虜たちの先進技術を活用して、地域経済を振興しようとした。計画の一環として富田久三郎はドイツ式畜産経営を企画した<sup>(2)</sup>。

静岡県生まれの富田久三郎(1852-1937)は、1891年に徳島県に移り、93年から板野郡瀬戸村(現・鳴門市)の製薬工場で、製塩副産物の苦汁を原料として医薬品を製造していた。他面で富田久三郎は、日本の農業と日本人の栄養に関して独自の見解を持っていた。彼は一方で日本人の米麦主義<sup>(3)</sup>を批判し、他方では「水呑み百姓」を「乳呑み百姓」に変えようとした。富田久三郎は自家飲用に乳牛数頭を飼育していたが、食生活の改善をさらに地域社会にも普及させようとした。1907年に長男富田鷹吉(1875-1939)と甥松本清一(1893-1976。ただし、麻布獣医畜産学校時代と入営中は不在)を通じて、牛乳の販売を開始したのである。瀬戸村富田牧場の牛の総数は07年に5頭であり、14年には16頭に増加した<sup>(4)</sup>。

このような酪農経営の実績を踏まえて、富田久三郎は、板東収容所開所前年の16年に、板東収容所の近くでドイツ式畜産経営を富田畜産部として創始することにした<sup>(5)</sup>。徳島県畜産技師や徳島俘虜収容所松江所長(当時)などと協議のうえであった。富田久三郎は純ドイツ式牛豚飼養場(牧舎)の設計を一捕虜に依頼した。この捕虜は従来、「技師」の「シュライダー」(船本 1968, p. 3), 「シュライダー」(才神 1969, p.173), 「捕虜シュレーダー」(林 1982, p.140), 「徳島収容所の俘虜で建築技師のシュライダー」(鳴門市史 1982, p.1094; 富田製薬 1992, p.88), 「シュライダーという、捕虜仲間では有名な技師」(林 1993, p.145), 「予備砲兵卒のシュライダー」, 「捕虜シュライダー」(棟田 1997, pp.134, 353)と言われてきた。しかし、瀬戸武彦教授のご教示によれば、ヴァルター・シュライバー<sup>(6)</sup>である。なぜなら、シュレーダーあるいはシュライダーという姓は、俘虜名簿 1917に見い出されないし、それに類似した姓を持ち、初め徳島、後に板東に収容された捕虜は、シュライバーだけであるからである。

翌17年に富田久三郎は板東で富田畜産部の用地、約25百平米を購入し、4月に牧舎の建築に着手した。地元の建築業者と板東収容所の捕虜、合わせて30人が共同で建築に従事した。建築費4,500円を要した工事は、同年8月に完成した。

周辺の家屋・畜舎とはまったく異なる、ドイツ風の外観の牧舎(以下では、これを慣用にしたがって「ドイツ牧舎」と呼ぶ)は、総2階建て、延べ面積335平米であった。1階は赤煉瓦造り、主として牛舎(東側)と豚舎(西側)であった。2階は木造・白壁塗りで、乾草飼料の備蓄などに充てられた。牧舎は19年の第2期工事によって東側に1階(牛舎)・2階とも増築され、延べ面積約450平米となった<sup>(7)</sup>。また、富田畜産部の用地は、21-27年の隣接地買い入れによって、80百平米に増加した<sup>(8)</sup>。

ドイツ牧舎には徳島県内最初の豚専用屠殺場<sup>(9)</sup>と豚肉燻煙場<sup>(10)</sup>も設けられた。

ドイツ牧舎の第一期工事とほとんど同時に、そして、同牧舎の隣に、簡素な二階建て日本式住宅も建てられた。船本純郎氏のご教示によれば、この建物は、ドイツ牧舎の廃材を利用したもので、半分

は一・二階とも日本間であり、上下をつなぐ階段があった。しかし、これと壁で隔てられた、残りの半分の床は土間で、この土間からは屋根裏を見ることができた。土間の一部分、3-4畳分の二階部分だけが板敷きになっていた。この二階板敷き部分と土間との間の昇降には、梯子が用いられた。この家は後に船本家住宅となった。

(注1) 板東収容捕虜が地元の人々に伝授した技術・技能として、本稿が対象とするクラウドニッツァーの畜産・酪農の他に、次のものが挙げられる。なお、本稿において、捕虜の所属部隊名のうち、第3海兵大隊第x中隊は海兵第x中隊、海軍膠州派遣砲兵大隊(膠州沿岸砲兵隊)第x中隊は砲兵第x中隊、俘虜名簿1917は俘虜名簿と略記される。

第1. 野菜栽培・加工。当時の板東町は米・麦中心の農業地帯であって、それ以外には、僅かな種類の野菜が栽培されていただけであった。農学士の捕虜シュミットは17年5月から板東町農会の要請によって、同会長藤井惣(あるいは嘉)之助の所有地5アールでドイツ式野菜栽培法を教えた。彼の指導はトマト、キャベツ、赤ビート、馬鈴薯、オランダミツバ、玉葱などの栽培法と野菜栽培用堆肥の計10項目に及んでいた。彼は付近の農民にケチャップ、腸詰、パン焼きも教え、さらに隣町の板西農桑学校でも講義や実習を行なった。才神 1969, p.173; 鳴門市史 1982, pp.773, 782; 林 1982, pp.91, 146-147, 235; 富田製菓 1992, p.90; 林 1993, pp.153-154, 212; Klein 1993, S.186; 棟田 1997, pp.88-90, 110, 147-148, 317, 324; ドイツ館 2000, pp.58, 77-78; 瀬戸 2001, p.119. 門鑑を持った捕虜が監視兵なしで外出し、技術指導するための作業場の一つとして、板東「農会…藤井惣之助 朝点呼後一タ方点呼時」が挙げられている。林 1993, p.60. — 特種技能俘虜 1918は、『俘虜二關スル書類(1)』第一章第六節「給養及勞役」附表第19號「俘虜職業調査表」の中の、「俘虜特種技能者調」を私が仮称したものである。これは、各収容所の調査結果を文章で記述しており、数値化された「俘虜職業調 1915」と「俘虜職業調 1917」とは異なる。この特種技能俘虜 1918の「農業」の項では、板東収容所「三名。内一名ハ園藝及野菜ノ栽培ニ巧ニシテ目下自費ヲ以テ二千四百坪ノ畑ヲ借り受ケ約二十三種ノ西洋野菜ヲ栽培シ〔収容〕所内ノ需用ニ應シツ、アリ園藝ニ於テハ蓬ニ菊ヲ接木ヲ施シ水瓜ヲ牛乳ヲ以テ栽培スル等目下其ノ準備ニ着手シツ、アリ。他ノ二名ハ当地ニ於テ何等ノ作業ヲナサルカ故其ノ実力ヲ知ルヲ得ス」。また、俘虜勞役表 1918(その長い正式題目は、本稿末尾の引用文献目録を参照されたい)は、18年の調査で、間もなく閉鎖される静岡と大分を含む8収容所について、記載している。この表の「所外勞役」、「所内勞役其他」、「慰安」の3項目すべてについて、板東収容所の記事は最も詳細である。この俘虜勞役表 1918の「所外勞役」の項に、「板東町農会ヨリ四反…(判読不能)…メ俘虜ヲシテ各種野菜ヲ栽培セシメ其方法ヲ傳授セシム」とある。さらに、「農林講習所ニ俘虜ヲ派遣シ農事ニ関スル傳授ヲナサシム」。この捕虜がハインリヒ・シュミット(Schmidt)であろう。彼は海兵第7中隊の上等兵で、本籍地はゴータであった。俘虜名簿, p.52.ゴータはザクセン・コーブルク・ゴータ公国の首都である。Ritter 1905, S.832.

また、エックハルトは板東の大森重蔵(茂)などにトマトケチャップの製造法を、ゲーベルは板東の黒田庫之助と板西の尾崎秋太郎にピクルスの製法を、後者にはトマトの栽培法をも伝授した。林 1982, pp.146-148; 林 1993, pp.154-155; 棟田 1997, p.324; 瀬戸 2001, pp.72, 79. — ラインホルト・エックハルト(Eckhardt)は糧秣集荷部の後備副曹長で、本籍地はシュトゥットガルトであった。俘虜名簿, p.15.これはヴェルテンベルク王国ネッカー県の都市である。Ritter 1906, S.961. オットー・ゲーベル(Göbel)は砲兵第5中隊の一等砲兵で、本籍地はレヒリッツ(Roechlitz)であった。俘虜名簿, p.20.これはプロイセン王国シュレージエン州リークニッツ県の村である。Ritter 1906, S.702.この村は大戦後はポーランドに属した。

俘虜勞役表 1918の「所外勞役」の項には、上記の記事に加えて、「収容所自ラ土地ヲ借入レ俘虜ヲシテ野菜ヲ作ラシメ〔収容〕所ノ需要ニ供ス」。また、同表「慰安」の項には、「収容所門外に民有地ヲ俘虜ヲシテ借受ケシメ野菜ヲ栽培( )俘虜自ラノ食用ニ供セシムルノ外各種運動設備ヲ自営セシム」とある。これは次の事情と関連する。捕虜のうち、外部からの送金がないために、経済的に苦しむ約200人は、僅かでも現金収入を得るべく、上記シュミットの指導の下に収容所柵外の共同農園でさまざまな西洋野菜を栽培し、その収穫物を収容所に納入した。

「農園 収容所外 午前8時—午後4時30分」と、「農場 収容所前商人宅 午前8時—午後4時」は、門鑑を所持する捕虜に対しては、自由な外出作業場として許されていた。板東警備警察官出張所の報告書には、試験農場を「昨今ハ農業学校生徒、農業会、百姓ナドノ見学者ガ絶エズ訪レマス…」とある。林 1993, p.60; 棟田 1997, p.110.さらに、林 1982, pp.91-92, 146-148を参照。

農畜産学土クノルも県下各地で農業講演を行なった。林 1982, pp.146, 148(ク・ノル); 林 1993, pp.153-154(ク・ノル); 棟田 1997, p.90 147(ク・ノル); 瀬戸 2001, p.95.エルンスト・クノル(Knoll)は海兵第7中隊の上等兵であり、本籍地はアーレンスベック(Ahrensböck)であった。俘虜名簿, p.32.これはオルデンブルク大

公国の村であった。Ritter 1905, S.26.

第2. 養豚・養鶏. 収容所内に養豚所が設けられたのは、18年から激しくなる豚肉不足と物価高に対処するためであった。ドイツからの慰問補助金で豚30頭が購入され、捕虜の残飯でもって飼養された。また、捕虜たちは所外の鶏舎で家禽2千羽を飼育した。このための資金は、松江所長が自ら保証人となって調達した。ドイツ式のこの養鶏場は、もと養鶏業者ヘルベルト・ブレーゲル(そのスペルは不明)の指導に委ねられた。これは「スベテ「ドイツ式」デアリマスノデ、評判ヲ呼び、昨今、参観者ガフエツツアリマス」(警備警察官報告書)、という状況になった。家禽(鶏と家鴨)を飼養する捕虜は、野菜を栽培する捕虜と同じように、毎日起床から日夕点呼まで(あるいは、午前6時—午後7時半)、所外鶏舎への出入りを許されていた。収容所前の借上地には、4箇所の鶏舎が確認される。94歳のもと士官ゴッペルトは「バンドーで鶏と豚を飼育していた」と、82年に語ったという。その他に、板東の「養豚・搾乳 朝点呼後—終了時間不定 久留島秀一」,「養豚 佐山八十吉」と「養豚 乾由太郎」の作業所には、門鑑を持った監視者が呼びに行けば、門鑑を持った捕虜が、監視兵を付けずに外出できた。富田 1991, pp.134, 19, 21; 林 1993, pp.60, 70-71, 110, 159, 212; 棟田 1997, p.110; ドイツ館 2000, p.35; 瀬戸 2001, p.79. 俘虜労役表 1918の「慰安」の一項に、板東「収容所門外ニ俘虜自営ノ鶏舎ヲ設ケシメ目下其數二千羽ヲ算ス」とある。—ゴッペルト=ゲプフェルト(海兵工兵中隊予備少尉)については、松尾 2002 b, 第1節(注18); 松尾 2002 d, 第1節(注5), 第2.(v)を参照。

第1と第2に関連して、所外数カ所にあった借上地(=菜園地)と養鶏場の場所は、富田 1991, p.21; 林 1993, p.110; ドイツ館 2000, p.35の地図に示されている。

なお、林 1982 (pp.91-92)によれば、捕虜たちは収容所周辺で新種の作物を栽培し始めた。収容所「当局は間もなく、収容所の外で捕虜を働かせ、管理する場合の規則を作った。…こうして300人を越えるドイツ人が、板東町農業会の直接の後援のもとに家畜飼育法や、経験を重んずる精神など、ヨーロッパ農業の粋を伝授することになった」とのことである。この人数は、「下士以下ニアリテハ毎月支給額寡少ナルヲ以テ余裕ナキ下士卒約300名ハ所内ニ於テ各自業務ニ従事シ其収入ヲ以テ生活費ヲ補給策ヲ講ジ一般困難ナク生活ノ状態ニアリ」(警備警察官報告書。林 1993, p.60より)の300人と関連するのではなからうか。

ペーア 1979は、その詩の中に次の数行を含む。「まもなくぼくらは最後に最後のキビ粥を持ってぼくらの鶏舎に行き、そこで最後の卵を取り、最後の鶏の鳴き声を聞く。…」。「そして最後に君は有刺鉄線の前で、君の最後のタマジシャを刈り入れるだろう。最後のエンドウ豆を取り入れるだろう。そして最後のホウレン草を掘り取り、それから最後の苗床を掘るだろう」。ペーア 1979, pp.70, 72-73; 林 1993, pp.208-209.

第3. 屠殺. ブオン・タラン、カール・ビュクネル、ハンス・アウグストの3人(これに相応する捕虜は、3人とも俘虜名簿 1917に見い出されない)は、県立農学校の招きで、生徒50人に豚の去勢手術や解体を演習した。鳴門市史 1982, p.774; 富田製菓 1992, p.90; 棟田 1997, p.90. 収容所内には収容所屠殺場と将校用屠殺場があった。富田 1991, pp.8-9. 所内にはさらに、林 1993 (p.71)によれば、牛乳搾取場もあった。

第4. 腸詰製造. 特種技能俘虜 1918の腸詰製造の項では、板東に「四名. 所内ニ腸詰製造所ニケ所ヲ有シ一ハ我商人出資シテ常ニ四名ノ俘虜ヲ使役シテ腸詰ノ製造ヲナシ毎月千六百円ノ賣上高ヲ有シ且ツコ(?)ノ技術ヲ修得スル為メ板野郡役所ヨリ中等學校卒業者三名ヲ補助金ヲ給シ毎日通勤セシメツ、アリ 他ノ一箇所ハ専ラ俘虜將校炊事ノ附属ニシテ將校准士官ノ供給ニ應ジツ、アリ」。これを俘虜労役表 1918の「所内勞役」の一項は次のように記述している。「徳島町民ヲシテ腸詰製造所ヲ所内ニ設置セシメ俘虜ヲ使役シ其製品ヲ所内及地方ニ販賣シム」と。収容所内の兵卒用・将校用食肉加工場(腸詰製造場)については、富田 1991, pp.8, 10; 林 1993, p.71; ドイツ館 2000, p.34を参照。

第5. 製菓. 収容所の菓子職人たちは、ガーベルを中心として、ドイツ菓子作りに腕を振るい、捕虜仲間や地元民に喜ばれたばかりでなく、その技術を地元民・将校夫人や日本人の弟子にも教えた。弟子の一人は、ガーベルから修業証書を授与された後、徳島市でパンとケーキの店、「独逸軒」を開業し、多くの弟子も育てた。鳴門市史 1982, pp.774-775 (ここに言及されている菓子職人オイゲン・バウムについて、相応する捕虜が俘虜名簿に見い出されない) ; 林 1982, pp.149-154 (リュエネブルク市出身のオイゲン・バウムに言及) ; 鳴門教育大学 1990, p.84; 林 1993, pp.120-121, 132, 148-149 (松江所長の添書を付けた、ガーベルのドイツ語修業証書あり。リュエネブルク市出身の予備役砲兵上等兵オイゲン・バウムに言及) ; 棟田 1997, pp.132, 196-198 (オイゲン・バウムに言及) ; ドイツ館 2000, p.58; 瀬戸 2001, p.77. 松山収容所で始まった、板東収容所の製菓所については、さらに、富田 1991, pp.117-120を参照。—これに関連して、俘虜労役表 1918の「所内勞役」の一節も製菓所に言及している。「所内ニ數十ノ勞役小舎ノ設置ヲ許可シ家具、玩具、彫刻模型、寫真等ヲ始メ編物製菓ニ至ル迄數十種ノ勞役ヲ爲サシメ其成品ハ俘虜間ノ需要ニ供セシムル外(,) 展覽會ヲ催シテ地方ニ販賣シ或ハ地方ノ注文ニ應ジシ目下一部ハ徳島ニ開催セル南海各縣物産共進會ニ出品中ナリ」。また、特種技能俘虜 1918の一節は次のとおり

である。(板東収容所)「製麵麴六名。内一名ハ上等ノ菓子ヲ製造スルコトニ巧ミニシテ所内ニ於テ日々上等ノ菓子ヲ製造シ所内外ノ好評ヲ博セリ。他ハ普通ノ職工ナリ」。なお、ハインリヒ・ガーベル (Gabel) は海兵第7中隊の上等兵で、本籍地はハンブルクであった。俘虜名簿, p.19.言うまでもなく、これはドイツ最大の港湾都市=自由都市である。Ritter 1905, S.913.

第6. 設計。本節「ドイツ牧舎」の他に、撫養駅、撫養町〔現鳴門市〕役場なども捕虜によって設計された。鳴門市史 1982, p.774; 林 1993, pp.152; ドイツ館 2000, pp.58.

第7. 洋酒醸造。捕虜は洋酒醸造の技術を伝えた。ヴェーバーとローデの二人は大阪市の一洋食品業者の要請で板東の大森重蔵(あるいは茂)方の納屋を借り受け、一部を改造して、ウイスキーとブランデーの製法を教えた。鳴門市史 1982, p.775 (フリック・ローデル); 林 1993, p.60 (収容所近くの外出作業場として、門鑑所持捕虜による「ウイスキー製造…大森重蔵 朝呼より終了時間不定」とある); 棟田 1997, p.90, 324 (ローデル); 瀬戸 2001, pp.115, 133. 俘虜労役表 1918の「所外労役」の1項には、「地方有資者ノ出費ニ成ル「ウキスキー」製造場ニ俘虜使役ノ計?ニシテ目下原料取寄中」と記されている。なお、ヨーゼフ・ヴェーバー (Weber) は砲兵第6中隊の二等砲兵で、本籍地はレクリンクハウゼン (Recklinghausen) であった。俘虜名簿, p.63.これはヴェストファーレン州ミュンスター県の村であった。Ritter 1906, S.660.また、フリッツ・ローデ (Rode) は海兵第6中隊の二等兵で、本籍地はハノーファーであった。俘虜名簿, p.49.これはプロイセン王国ハノーファー州ハノーファー市 (Ritter 1905, S.918) であろう。

第8. 石鹸製造。板西町で石鹸製造を指導した捕虜(氏名不詳)もいた。林 1993, p.152.

第9. 酪農。徳島県「鳴島町附近の索(素)封家石原」家に雇われて、解放後2年余り酪農に従事した旧捕虜(氏名不詳)がいた。船本 1968, p.6.

第10. 自転車修理。俘虜労役表 1918の「所外労役」の1項として、「板東町民家ニ自転車修理場ヲ開設シ俘虜ヲシテ之カ修理ヲ實施シ且技能ヲ傳授セシム」と、記されている。

第11. 印刷その他。特種技能俘虜 1918に記載された、板東における技術移転のその他の事例を示してみる。「印刷工。一名。植字工ナルモ当所ニ於テハ謄寫版ノ使用ヲ巧ミニ各種ノ文字絵画ヲ謄寫セルヲ見ルニ一見石版刷ノ如キ觀アリ目下所附下士ヲシテ其ノ方法ヲ見學セシメアリ」。「焼画師二名。地形図ノ測量ニ巧ミニシテ一名ハ支那丈量局ニ勤務シアリ嘗テ所内外ノ土地建築物ヲ測量セシメタルニ其ノ技能精巧ナルヲ認メタリ」。「料理人。高等料理店ニ多年業務ニ従事シ其ノ料理ハ屢々当所職員ノ宴会ニ充テシカ其ノ技倆良好ナル者ト認ム」。

(注2) 船本 1968, p.3; 林 1982, p.139; 林 1993, pp.28, 145.これに関連する事情を、『バラック』の一論説、「板野郡の行政と司法」(17年10月)は次のように記述している。板東が属する板野郡では、「畜産はまだほとんど発達していない。欧州大戦と板東での収容所開設の結果、この地方全体に家畜と食肉の価格が大幅に高騰した」と。バラック 1998, p.41.さらに、富田 1991, p.186を参照。

(注3) 富田久三郎の言う米麦主義は、主食(満腹感)を重視し、副食(栄養バランス)を軽視する見解であろう。久三郎は「日本人は米麦食主義で、これではいかん。どうしても牛乳やパンに食改善せないかん」と話していた、と松本清一は、後年になって語った。富田製菓 1992, p.161.船本宇太郎の晩年の回想によれば、第一次大戦「当時の日本では、一般に栄養の問題はなおざり」で、「勝利国民の日本人が麦めしに沢庵、敗戦国民のドイツ俘虜が肉を食べべている」状況であった。棟田 1997, p.135.

(注4) 鳴門市史 1982, p.1092; 富田製菓 1992, pp.59-61, 93.瀬戸村富田牧場の搾乳量は07年に約1,440リットル、14年に約5,590リットル、29年に9,963リットルで、牛乳売上額は07年に391円、14年に1,410円、29年に2,574円であった。富田製菓 1992, p.87.なお、乳牛1頭の価格は15年頃に200円、17-18年頃に200-300円であった。船本 1968, p.9; 富田製菓 1992, p.87.——瀬戸村富田牧場の創業を09年とする船本 1968 (p.7) は誤りであろう。

(注5) ドイツ牧舎の出資者・経営者はしばしば富田鷹吉(林 1982, pp.141, 236; 林 1993, pp.145, 213; 富田製菓 1992, p.91 <18年の警備警察官報告書>), あるいは、松本清一(富田製菓 1992, p.161 <松本清一の後年の談話>), あるいは、富田鷹吉と松本清一の両名(船本 1968, p.3; 林 1982, p.140; 鳴門市史 1982, p.774)とされている。しかし、富田久三郎とすべきであろう。鳴門市史 1982, p.1094; 富田製菓 1992, p.88.徳島県知事の豚専用屠殺場設置許可書(大正8年5月9日付け)と同使用認可書(同年6月26日付け)とは、富田久三郎宛である。富田製菓 1992, pp.91-92. 富田久三郎・鷹吉父子については、富田製菓 1992, 第1-第5章の各所を参照。棟田 1997 (p.134) がドイツ牧舎の経営者を久留島秀一としているのも誤りである。小規模な久留島搾乳所(牛4頭)は、ドイツ牧舎の南側に17年に創業したもので、富田久三郎はこれを援助した。富田製菓 1992, p.89. 林 1993 (p.186) は、74年の「ドイツ兵を偲ぶ会」発会式の出席者として、「船本宇太郎(畜産, ドイツ牧舎)」と並んで、「久留島秀一(ドイツ人の指導を受けて酪農経営)」を記している。門鑑を持った捕虜の作業所としての「養豚・搾乳…久留島秀一」については、本節(注1)第2で言及した。



俘虜労役表 1918の「所外労役」の冒頭に記されているのは、次の事情である。「地方有資者ヲシテ純獨逸式飼畜搾乳場ヲ設置シ多數ノ牛豚ヲ飼養セシメ之カ設備畜類ノ馴致飼養搾乳屠殺等總テ俘虜ヲ使役シ牛乳豚肉ハ收容所ニ供給スルノ外剩餘ヲ地方ニ販売ス」。この地方有資者は富田久三郎を、純獨逸式飼畜搾乳場はドイツ牧舎を指し、これを運営する捕虜の中心はクラウスニツァーであろう。また、特種技能俘虜 1918には、板東收容所の「特種技能者」の一人に関して次の記事がある。「牧畜一名。牛豚ノ飼育管理並ニ牛乳加工品即チ「バタ」(＝バター)「ケーゼ」(＝チーズ)「ザーネ」(＝生クリーム)ノ製造ヲナシツ、アリ。之レカ為メ乳牛二十頭ヲ俘虜ノ設計ニ依リ純獨逸式牛舎ノ建築場(?)ニ於テ日々收容所並ニ地方一般ノ需用ヲ満シツ、アリ」。この「一名」はクラウスニツァーを、この「牛舎」はドイツ牧舎を指すはずであり、18年8月の飼育乳牛頭数が20頭と記述されている。

(注6) ヴァルター・シュライバー (Schreiber) は砲兵第4中隊の二等砲兵で、本籍地はタルノヴィッツ (Tarnowitz) であった。俘虜名簿, p.54. タルノヴィッツはプロイセン王国シュレージエン州オッペルン県の村であった。Ritter 1906, S.1005. この村は大戦後はポーランドに属した。

(注7) ドイツ牧舎の1階平面図は富田製菓 1992, p.89にある。それによれば建物の東西が23.1mで、南北が8.5m、一部14.0mである。東側の牛舎は8.5m×14.0mで、西側の豚舎は9.5m×6.6mである。また、牛舎の西に6.0m×2.5mの飼料庫、豚舎の北に4.5m×6.6mの豚屠場がある。さらに、牧舎の北側に1.5m×1.5mの煙燻場が設けられている。本節(注5)で言及した豚屠場許可書・認可書の日付け、本節(注10)の豚肉煙燻場に関する報告の日付け、および、「その後…牧舎横に畜殺場を併設」との記述(鳴門市史 1982, p.774)を考慮すれば、この平面図は、豚舎北側の豚屠場と牧舎北側の煙燻場を含むので、第2期工事後のものであろう。

(注8) 富田製菓 1992, p.89. ただし、林 1982 (p.140)によれば、牧舎の当初費用4,500円は牛と豚の購入に充てられた。また、棟田 1997 (p.353)によれば、ドイツ牧舎は「大正6年(1917年)の7月」に建てられた。

(注9) 本節(注5)で触れた、豚屠殺場許可書・認可書の日付けから見て、その設置は19年である。捕虜のハナスキーとビードレ(スペル不明)が豚の解体を担当した。なお、板東收容所の肉消費量は毎月牛30頭(肉6,000kg)、豚100頭(肉5,800kg)に上っていたので、富田畜産部の供給する肉だけでは、收容所の需要を充たすことはできなかった。富田製菓 1992, p.89. さらに、林 1993, p.70(收容所は17年11月に牛29頭、豚90-100頭の肉を使用した)を参照。船本宇太郎の回想では、「豚の方では毎日2、3頭の加工用豚が(收容所に)要るので、県内産ではまに合うはず」がなかった、という。また、ハナスキーは、收容所に豚肉を供給する、「御用商人経営の養豚場」に雇われていた。船本は肉加工技術をプロツフ・ペーアゲーア(スペル不明)から習得した。船本 1968, p.3. オットー・ハナスキー (Hannasky) (ハナスキー) は砲兵大隊第3中隊の予備二等砲兵で、本籍地はグーベン (Guben) であった。俘虜名簿, p.23. グーベンはプロイセン王国ブランデンブルク州フランクフルト県の都市である。Ritter 1905, S.887. グーベンの市立文書館からの回答によれば、同市のかつての公文書は第二次大戦末期に焼失したので、オットー・ハナスキーに関する文書も残されていない。同市の刊行住所録にも彼は記載されていない。彼は日本からの帰国直後には同市のドーリンク (During) 牛豚肉店の肉屋親方であったのであろう。23年の同市刊行住所録は、離婚したハナスキー夫人を記載している。しかも、彼女の住所はドーリンク牛豚肉店の住所と同じである。グーベンの市立文書館回答。

(注10) 豚肉煙燻場(9坪)については18年12月に警備警察官が報告している。富田製菓 1992, p.91; 林 1993, p.150. さらに、林 1982, p.236; 林 1993, p.213を参照。

### (3) ドイツ牧舎の指導者クラウスニツァー

ドイツ牧舎は、牛と豚を飼育し、食肉、牛乳<sup>(1)</sup>、各種畜産品(生クリーム、ドイツ式レバー・ソーセージなど)を板東收容所に供給した。ドイツ牧舎の家畜頭数は、管理人船本宇太郎の後年の回想によれば、当初は牛、豚ともに数頭であったが、後には牛14-15頭、豚20-30頭に増加した<sup>(2)</sup>。

ドイツ牧舎の責任者になったのは、伯父富田久三郎に勧められた麻布獣医畜産学校を15年に卒業し、兵役も終えて、瀬戸村富田牧場を再び担当していた松本清一<sup>(3)</sup>である。麻布の学校で松本と同期で、徳島県南部生まれの船本宇太郎(1895-1980)<sup>(4)</sup>が、兵役を終えて5ヶ月後、ドイツ牧舎の落成から2ヶ月後に、管理人として招かれた。技術指導者は捕虜クラウスニツァー<sup>(5)</sup>であった。

フランツ・クラウスニツァーは青島要塞ではドイツ第3海兵大隊第2中隊の上等兵(一等兵)で

あり、本籍地はザクセンのブランドであった。彼は日本ではまず丸亀に収容され、次いで板東に移された<sup>(6)</sup>。彼の中隊は現役兵の中隊の一つであった<sup>(7)</sup>。

クラウスニツァーは収容所からドイツ牧舎に毎朝出勤してきた。一般の捕虜の起床は、6時であった<sup>(8)</sup>けれども、毎朝5時にクラウスニツァーを収容所の彼の居室に呼び出しに行くのが、船本宇太郎の日課であった<sup>(9)</sup>。収容所の規定に反して、彼がドイツ牧舎に泊まり込む場合もあった。前節本文の最後で触れたように、ドイツ牧舎の隣に、牧舎の余材を利用して、簡素な住宅が建てられていた。クラウスニツァーが泊まり込んだのは、船本純良氏のご教示によれば、この家の、梯子を使って昇降する、小さな屋根裏部屋であった。したがって、厳密にはドイツ牧舎内ではなかった。

彼は、帰国する<sup>(10)</sup>まで、ほとんど1日も休まずに、出勤した<sup>(11)</sup>。

「立派なカイゼル髭を生やした大男」の彼は、松本と船本にとって「いかつい体格に似ず気立てのよい先輩であり、何よりも信頼できる友人だった<sup>(12)</sup>」。彼は畜産の豊かな経験と家畜への深い愛情を持ち、責任感が強かった。彼が松本と船本に伝授した畜産技術は、牧舎内の温度の保ち方、牧舎の清掃、飼料の与え方、家畜分娩時の処置など、家畜飼育のあらゆる面に及んでいた。彼はまた、悪臭を放つ厩肥の搬出・厩舎の清掃を含めて、畜産業のいかなる労働も厭わず、自分の行動で手本を示した。彼はさらにクリーム、バター、チーズなどの酪農製品の製法も教えた。このようにしてドイツ牧舎関係者は、畜産と酪農に関して非常に多くをクラウスニツァーから学んだ。こうして習得されたドイツ式酪農技術は、徳島県の酪農技術を著しく向上させた<sup>(13)</sup>。

クラウスニツァーの帰国後間もない時期に、松本清一は「ドイツ俘虜の生活と家畜管理」について講演した。その記録が残されている。これによれば、松本は「大正6年1月から同9年1月迄約3ヶ年間板東…に収容されたドイツ人に接し」ていた（板東だとすれば、「大正6年1月から」でなく、大正6年4月以降、でなければならない。もちろん、すでに同年1月から徳島収容所のドイツ牧舎設計者ヴァルター・シュライバーと接触していた可能性はある）。「ドイツ牧舎」は、煉瓦壁が高さ約9尺、厚さ8寸乃至1尺あるほどに、壁の厚い煉瓦造りであった。クラウスニツァーは、「冬季牛豚舎に侵入する賊風を予防するために各出入口の開閉、窓の密閉については一層の注意を払い何人を論ぜずに、やかましく督促し、そして舎内温度の激変を徹頭徹尾防ぐことに務めて」いた。また、夏季には舎内後方及中央の作業通路への撒水が一日数回行なわれた。そのために、ドイツ牧舎は夏は涼しく、冬は暖かであった。畜舎の最適温度は摂氏15度であるが、ドイツ牧舎では夏は摂氏16度以下で、冬は12度以上であった。とくに冬には、一般の日本家屋では気温が約7度になるけれども、ドイツ牧舎は、出入口と窓を密閉できるので、厩舎内温度を家畜の適温に維持することが容易であった。そのために、ドイツ牧舎は当時の日本の厩舎よりも家畜飼養に適していた。

このドイツ牧舎で「私（松本）は、…クラウスニツァートという余り学歴はありません<sup>(14)</sup>が、畜産に経験のある者を雇入れ」、「主として乳牛及び養豚の飼養管理をやらせました」。彼は、病気をし気分が悪くなった時もあったけれども、「作業上、殆んど一日の休業もすることなく、自分の職責に対してはよく実行、その責任を全うし」た。例えば、「一夜として欠かさず牛豚舎を巡視し、その異常なきを認めた後（に初めて、）床に入る」のであった。彼はまた乳牛の訓育に極めて巧みであったので、ドイツ牧舎が買入れた牛は、1-2週間も経てば順化されてしまい、隔木のない牛舎で隣

牛と争わなくなるほどであった。

「或夜、大降雨、…私共は夕食中にて…終日の労を語りあつておりました。所が、突然消灯暗黒になりました。その時、彼は二階の休憩室から数度ランペランペと繰返しつつさげんでおりました。私（松本）がそれを無視していたところ、彼は「階段を下り、直ちに自ら燈火してすぐ様、豚舎に走りました。あに計らざりき、一兩日前種豚が十頭を分ベン〔媿〕し、その子豚は母豚と共に一室に入れてありました。若し暗きことが久しかりせば、或は母豚の不注意や目に触れない為子豚の母豚腹下に敷かれるなど不慮の損失を考慮しての事なりしを知りました。何と気の付く奴かと又家畜に対する細心の注意を忘却しない点は、大いに私は愧じたことがありました」。

「彼は毎週水・土曜日の両日には晴雨に係（拘わ）らず、牛豚舎の大掃除を励行しました。これは「実際に骨の折れる」ことでしたが、「彼は、こういう風に掃除が行届けば、決して「リンダーペスト（牛ペスト）」「シユワネーペスト（豚コレラ）」ありませんと、（言いました。これ）亦、真なることで、これを見ても、衛生的一般思慮の深いことが判るのであります」。

「牛豚の飼養管理は他の作業に比して、一般に不潔な仕事が多く且つ、作業服なども汚染することが甚だしいが、彼は、毎日必ず作業服と休憩又は終業後の常用服とを判然区別して四期を通じ、作業中は必ず作業帽子を冠つており、これは自分の頭部の汚染や或は不慮の傷害を予防するのであります。又作業服の如きは、晴天の日を撰び暇を見出しては、よく洗濯して、ついに汚染又は悪臭あるものを着用することはなかつたのであります。「彼は常に出来る限り、乳牛の安静によく意を留め、乱りに他人の厩内に入りし又は喧噪し或は不意に牛体に手を触れるなど、之を驚かすが如きは努めて厳格に戒めつゝ、亦避けておりました。神経過敏な、殊に優良乳牛の如きは、此の風習を常に守るなど、誠に適切なることと考えられます<sup>(15)</sup>」。

彼は搾乳、飼付などの作業時刻を「軍隊以上、正確」に守った（「時間尊重、定時励行」）。他の捕虜と同じように彼は時計を、しかも、「外觀美ならざる」時計を持っており、それを「起居動作において、時間励行の羅針盤」としていた。彼は、「金時計金鎖を持っていても、時計の活用をしない」日本人を「笑つて」いた。また、社会生活上の、「他人に対する礼儀については、常にどんなに自分より目下の者にも必ず朝夕の挨拶を怠らず、偶々来場せる人に向つても決して欠礼することなく、且つ容儀を正さぬことはない」という態度であった。さらに、人と反目した時、人に当たる代わりに家畜に乱暴する人がいるが、彼はこのような場合に、かえつてその家畜によって心の怒りを撫めていた<sup>(16)</sup>。

彼は「飼養中の家畜の栄養状態の可否、健康の程度によく目を通し」ていた。飼料の「営（栄）養価値、その他について常に細心の注意と（注意を払い、）安価にして有効なるものを得んことに充分なる研究の頭を持つて」いた。厩肥の利用法に関しては、厩肥は作物に施肥するのではなく、「牧農本位」の長期的計画に基づいて、深耕した田畑に厩肥を埋めて、土地そのものを肥沃にするべきである、と考えていた<sup>(17)(18)</sup>。

（注1）船本宇太郎の回想によれば、「当初私の務めは「ティーアーツ」（獣医）などといういかめしいものでなく、門鑑つて牛乳車をひっぱつた一介の御用商人として所内に設けた小さなバラックまで牛乳を運んで行きます。そこにはブツマン（仏満）という名にふさわしいあごひげのある西洋の仏様のようなよい顔をした海軍兵が、一人一人に売

りさばいてくれるのですが、私の行くのが少しおくれると念仏をとなえるように何かつづやいているが私にドイツ語は判らない。しかしどうやら時間を勵行してくれといっているらしい。それもそのはずで、買手が五、六十人も一列に整然と並んで自分の番の来るのを待っているのです。最初私はそれを見てびつくりしました。少し早めに行くと皆冷水まさつの真最中」。船本 1968, p.5。—このブツマンあるいはフランツ・ブツマン (Buzmann) は、砲兵大隊第5中隊の一等砲兵で、本籍地はアームズドルフ (Amesdorf) にあった。俘虜名簿, p.12。これはアンハルト公国の村であった。Ritter 1905, S.75。また、彼の牛乳・氷販売所は収容所正門のすぐ近くにあった。富田 1991, pp.17-18。

ところで、四国3収容所の捕虜たちは板東に集結すると間もなく、板東収容所健康保険組合を組織したが、その発端が丸亀時代の16年10月にあったことは、すでに松尾 2002 a, 第3節 (注10) で言及した。この丸亀組合の発起人が下士官のデーゼブロック (Desebrock) と上等兵のカルル・アルバース (Albers), カルル・ヒンツ (Hinz), フランツ・クラウスニツァーの4人であった。Klein 1993, S.109 (瀬戸武彦教授のご教示による)。ただし、Klein 1993は場所を丸亀でなく、久留米と誤記している。発起人の4人は17年にはいずれも板東におり、以前には丸亀にいたのである。瀬戸 2001, pp.60, 70-71, 86。この4人のうち、ヘルマン・デーゼブロックは海兵第2中隊の下士官で、本籍地は自由都市ハンブルクであった。俘虜名簿, p.13。次に、カルル・アルバースは海兵第7中隊の上等兵で、ハンブルクが本籍地であった。俘虜名簿, p.5。第3に、カルル・ヒンツも海兵第7中隊の上等兵で、本籍地はブリースドルフ (Bliesdorf) であった。俘虜名簿, p.25。これはプロイセン王国シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州オルデンプルク県の村であった。Ritter 1905, S.275。—ドイツ帝国宰相ビスマルクが作り出した社会保険制度のうち、最初に実現したものが1883年の疾病保険法であり、1911年には、統一的な社会保険法に拡充された。疾病保険の場合、掛金は雇い主が1/3を、被雇用者が2/3を負担した。Fischer 1912, S.69, 81-83。それに対して、板東収容所健康保険組合は捕虜の自主的献金、ドイツ、中国などからの救援物資に主として依存していた。林 1982, p.90; 富田 1991, pp.125-130, 177-179; 林 1993, pp.82-83; ドイツ館 2000, pp.50-51。

この板東収容所健康保険組合は「1917年年次報告」で「搾乳夫クラウスニツァー」に言及している。それによれば、「設立以来組合が活動のために必要とした」、「約1200円にのぼる全支出の3分の1は、牛乳の大きな需要であった。周辺から収容所に供給される日本の牛乳は(捕虜中の)病人に不適当と判断されたので、組合は牛乳全部を北海道(!)のフランス系トラピスト修道院から取り寄せねばならなかった。戦友である本職の搾乳夫クラウスニツァー一等海兵の指導する収容所酪農所の設置以来、牛乳にかかわる費用は著しく減少した」。バラッケ 1998, pp.244-246。牛乳代411.98円は組合の年間総支出1312.04円の31%に当たる。さらに、富田 1991, pp.180-181 (17年10月半ばまでは牛乳は北海道から); 林 1993, p.83; ドイツ館 2000, p.52を参照。この記事で「収容所酪農所」と呼ばれており、17年10月後半には牛乳を生産し、収容所に供給していたものが、「ドイツ牧舎」と考えられる。その他に「徳島衛戍病院の出費」として牛乳32.36円が支出されたが、これの購入先は不明である。ただし、健康保険「組合設立に際して、日本の出入り商人が5000円を寄付したので、組合はその金で10頭の乳牛を購入して、所内にミルクを供給したり、余った分をバンドーの農民に販売したりした」(林 1982, p.90)、という記述は理解しにくい。少なくとも同保険組合の初年度決算書(富田 1991, p.181; バラッケ 1998, p.244)には、出入り商人からの「寄付金」5千円も、乳牛10頭を購入するための「一回限りの支出」も記録されていない。

健康保険組合の18年度報告も、同じように「収容所酪農場」に言及している。「患者および健康者にとってもっとも大切な栄養源である牛乳が今年もふたたび(支出中)最大の地歩を占めている。つまり、500円を越えている。あの流行病(スペイン風邪。板東収容所では18年11月に頂点に達した)の間に消費した牛乳代の157.60円というこれを越える金額は、健康保険組合の切なる申し立てによって収容所当局が引き受けてくれた」。牛乳価格は年頭の3.5銭から5銭に上昇した。牛乳のほぼ全量(=13,927本, 2,500リットル以上)を供給したのは、「収容所酪農場」であった。その他に徳島陸軍病院のために12.83円の牛乳代が支払われた。富田 1991, pp.128-130; ドイツ館 2000, pp.50-52。健康保険組合の収容所用牛乳支出分は年間総支出、約2,880円の17%に当たる。さらに、林 1993, p.83を参照。

なお、18年度板東収容所宛義捐金から支出された「食糧」費(「栄養補給」費)の中に、「牛乳、メリケン粉、米」391円余りがある。富田 1990, p.132; 林 1993, p.85; ドイツ館 2000, p.30。ただし、その中で牛乳代はどれだけか、牛乳の購入先がどこか、は不明である。

(注2) 船本 1968, p.3。「不幸にして大正時代の記録を紛失し、確実なことは申されませんが…」(船本 1968, p.9)と、当事者である船本が後年述べているように、ドイツ牧舎の正確な飼養家畜頭数は不明である。そこで、本稿本文の記述は、船本の記憶に基づく、後年の記述に依拠している。

ドイツ牧舎の家畜飼養頭数についての諸説を挙げておく。豚は当初は数頭(船本 1968, p.3)、10頭(富田製菓 1992, p.89)、あるいは、30頭(林 1982, p.140)であった。後には豚は20-30頭(船本 1968, p.3; 林 1993, p.145)、あるいは、30頭(鳴門市史 1982, p.774; 富田製菓 1992, p.89)となった。増加を示している資料が多

い。牛は当初は数頭(船本 1968, p.3), 4頭(才神 1969, p.173; 棟田 1997, p.134), 10頭(鳴門市史 1982, p.774; 富田製菓 1992, p.89; 林 1993, p.145; Klein 1993, S.185), あるいは, 20頭(鳴門市史 1982, p.774; 林 1982, p.140; 林 1993, p.145)であった。後には牛は14-15頭(船本 1968, p.3; 鳴門市史 1982, p.774; 富田製菓 1992, p.89), 16頭(才神 1969, p.173; Klein 1993, S.185; 棟田 1997, p.134), 20頭(18年8月の収容所側の記録。本稿第2節(注5)), あるいは, 28-30頭(林 1993, p.145)になった。ここでも, 増加を示している資料が多い。

牧舎の1日の搾乳量は, 棟田 1997 (p.134)によれば, 初めは18リットルであった。後には90リットル(棟田 1997, p.134), あるいは, 100リットル(富田製菓 1992, p.90)に増大した。

Klein 1993 (S.185)によれば, 板東には「模範的な酪農場」があり, 「乳牛10頭, 後には16頭が飼養」され, クリーム, バター, ヨーグルトを生産した。その他に, 収容所は18年11月に鶏1,008羽, 家鴨282羽, 鶯鳥30羽, 鳩75羽, 兎51羽, 蜜蜂巣箱数個を持っていた。

(注3) 静岡県生まれの松本清一は, 伯父富田久三郎の富田製菓に入社し, 久三郎の自宅で搾乳業にも従事した。松本は麻布獣医畜産学校卒業後, 徳島に帰り, 瀬戸村富田牧場の経営に取り組んだ。しかし, 間もなく同15年野砲兵第11連隊に「一年志願兵として」入隊, 19年に「陸軍3等獣医に任ぜられ, 28年に「陸軍2等獣医に昇進」した。富田製菓 1992, pp.60, 145-146。上の記述からは, 松本清一が15年から28年まで継続して陸軍勤務であったように読めるけれども, 松本修平氏・船本純良氏の推定では, 松本清一は1年余り後には除隊した, と考えられる。入隊後1年半の17年5月に除隊した船本宇太郎(次注)も, 陸軍3等獣医・予備役獣医少尉の称号を得たのは, 除隊後の19年3月であったからである。また, 松本清一は陸軍2等獣医に昇進する1-2年前にすでに, 「板野郡畜産組合総代会議員に当選」, 「瀬戸村青年団長に就任」, 「徳島県獣医師会会長に就任」していた。富田製菓 1992, pp.145-146。これらの地位は, 除隊後でなければ, 就任不可能であろう。19年以前, おそらく船本宇太郎と同じ17年5月, の除隊も, これから類推できるであろう。

(注4) 船本のドイツ牧舎就職年代は船本宇太郎履歴書(没年の加筆あり)による。この履歴書によれば, 徳島県海部郡に生まれた彼は, 15年3月に麻布獣医畜産学校を卒業, 同年12月に野砲兵第11連隊に獣医として入隊, 17年5月に除隊, 「大正6(=1917)年10月より富田製菓畜産部(富田畜産部において)ドイツ人技術者を利用して酪農経営, 養豚, 乳肉製品の加工技術を習得する。約2年間」, 19年3月陸軍3等獣医・予備役獣医少尉昇任, さらに, 54年に富田畜産部を船本三愛牧場に名義変更, となっている。また, 彼の回想によれば, 「学校も軍隊も同期」である松本清一に招かれて, 船本が板東に「来た頃には畜舎もほぼ完成し, 牛も豚も数頭は入っている」た。船本 1968, pp.1, 3。船本宇太郎がドイツ牧舎に就職した時期に関しても, いくつかの説がある。(1)17年夏説。船本は「東京麻布の畜産学校を卒業して, 普通寺師団の砲兵第11連隊の獣医部に入隊する。除隊したとき, 牧舎は建築中であった」。棟田 1997, pp.135, 353。鳴門市史 1982 (p.1094)も, ほぼ同じように, 船本はドイツ牧舎(17年夏落成)の最初から招かれていた, と記している。(2)大正5年説。板東で「ドイツの専門技術者」と「協力してドイツ式牧場経営を試みるようになった」。「麻布畜産学校を卒業したばかりの船本が板東にやってきた」のは, 「大正5年」であった。林 1982, p.139。これは誤りである。この年には板東収容所もドイツ牧舎も完成しておらず, 船本はまだ軍隊で勤務していたからである。(3)大正8年説。ドイツ牧舎は「大正8年に第2期工事」を行ない, 「同年松本の友人…船本宇太郎を招いて管理人とした」。富田製菓, p.89。船本履歴書に依拠するならば, これも誤りであろう。また, この説によるならば, 船本とクラウスニツァーとの接触期間は僅か1年に満たないことになる。

(注5) 俘虜職業調 1915と俘虜職業調 1917および『バラック』の「われら板東人」の統計に含まれたであろうクラウスニツァーに関しては, 本稿第1節本文を参照。富田久三郎がドイツ牧舎の建設を決断した時, クラウスニツァーは徳島ではなく, 丸亀に収容されていた。

板東収容所の捕虜たちにはクラウスニツァーの名は良く知られていた。まず, 健康保険組合の17年度報告が彼に言及している(本節(注1)参照)。また, 『板東俘虜収容所案内記(書)』の「第二部」には次の記述がある。収容所の「門のすぐ前の, 板東に通ずる道路の左右にまず見えるのが養鶏場で, ついで酒保に品物を納入する日本人の家がある。…この機会に言及しなければならないことは, その背景に見える酪農場と畜舎である。これはある日本人のものであるが, クラウスニツァー上等兵が指導している(牛乳の注文については第一部の63項を参照)。特別許可なしにこの施設を訪問することは許されない。借上地域の境界外にあるからである」。そして, 同書「第一部」の63項には, 「衛兵所横の小屋(…ブーツマン)牛乳の注文(1本4銭)牛乳の受領 午前5.45-6.30 午後5.00-5.30」と記されている。富田 1991, pp.17-20。ペーア 1979 (pp.72-73; 林 1993, p.209。さらに, 瀬戸 2001, p.62を参照)も彼の詩の一節で次のように歌っている。「そうだ。間もなく最後にクラウスニツァー(Clausnitzer)は彼の厩舎で, 彼の最後の雌牛の乳をしぼるだろう…。なお, 棟田 1997 (p.174)では, この部分が「トミタ牛乳搾取所へ, クラウスニツァーが牡牛(?)から最後の乳をしぼりにいった」, となっており, 才神 1969 (p.173)では,

導入された乳牛の新種が、「クラウスニツェル種」とされている。

- (注6) 俘虜名簿, p.12; 瀬戸 2001, pp.69-70; 松尾 2002b, 第1節第1表37, 第2節第2表10. クラウスニツァーは, 17年4月に久留米収容所から90人が受け入れられる以前には, 収容所正門から最も左奥のバラックの1室で, ヨーゼフ・ポート (Both), マックス・ヘラー (Heller) の2人とともに生活していた. この部屋はハインリヒ・グロスマンの部屋 (松尾 2002a, 第4節(注3)参照) と廊下を隔てて向き合っていた. Adressbuch 1918, S.55. 私はこの貴重資料を田村一郎館長のご厚意で読むことができた. ——ヨーゼフ・ポートは野戦砲兵隊第2中隊 (これは野戦砲兵隊か海兵第2中隊かの誤植ではないであろうか. 野戦砲兵隊は, 海兵第3大隊の付属部隊であった [瀬戸 2001, p.139] からである) の二等兵で, 本籍地はマイエン (Mayen) であった. 俘虜名簿, p.10. マイエンはプロイセン王国ライン州コブレンツ県の都市である. Ritter 1906, S.208. また, マックス・ヘラーは海兵第2中隊の上等兵で, 本籍地はザクセン王国ジーベンレーエン市であった. 俘虜名簿, p.24. さらに, 松尾 2002b, 第1節第1表79, 第2節第2表23を参照.
- (注7) 松尾 2002a, 第2節(注6).
- (注8) 松尾 2002a, 第4節(注3).
- (注9) 船本 1968, p.4. 船本はさらに追記している. 「私は毎朝五時前に衛兵所に断つてクラウスニツァー君を迎えに行くのですが, 室の前で小さな声でその名を呼ぶと, ヤア (ハイ) と返事して急いで起きてきて, モーエン (グーテンモルゲン・おはよう・の略) と挨拶します. これらの点は, 松本 (清一) 君の書いている通り責任感念も強く, 礼儀も心得ているからです. 然し冬の寒い朝や風雨の強い時は, こちらがまいつてしまいます. その頃, 副官をしていた人に高木 (繁) という大尉がおられ, その事情をよく知つてくれていました. この人は…非常に太つ腹で少々無理なことでも聴いてくれる人で, ドイツ人との間に最も信頼されてきました. 三, 四ヶ月たつて家畜管理のために必要ということでクラウスニツァー君から当方に外泊させてくれと頼んだと思います. この表向き許されない事を, (高木) 大尉は私に注意して自分の一存で黙認してくれ, その後ずつと当方に宿泊させてくれ, 私も助かりましたが, 所内に兎に角いう者が出て逐 (遂) に問題化し, 大尉にも迷惑をかけました. その時所長松江大佐が一人で取調べに来られ, 私も苦しい答弁をしましたが, この所長もまことに温厚な人で, この事も実はそれまで知つて知らぬ顔をして居られたのでしょう. こうした温情もあり, 度胸のある係官が居られたことが「板東収容所は寛大であつた」といわれ, 又当時のドイツ人が今, 尚板東をなつかしむ大きな理由の一つになっていると思います. 船本 1968, pp.4-5.
- (注10) クラウスニツァーの日本出発・本国到着年月日は日本側資料では不明である. これについては, 松尾 2002d, 第5節(1)を参照.
- (注11) ただし, 棟田 1997 (pp.217-218, 225, 233, 236) は次の事情を記している. 18年秋に「久留島牧場, 富田搾乳所, 佐山養豚場」のような民間事業所に雇用されている捕虜が, 100人弱いた. 18年9月 (最初の発病者は日本側衛兵) から12月まで板東収容所でインフルエンザ (スペイン風邪) が猛威を振るつたので, 当局は捕虜全員に外出を禁止した. 捕虜側の最初の患者は10月に発生した. もちろん, 「酪農場や搾乳場, 燻製場や, ウィスキー製造場などの経営者から, それぞれ雇傭契約をしている俘虜技術者を一日もはやく派出してもらいたいという要望が, しばしば申し込まれ」た. 外出禁止は12月22日まで続いた. それに対して, 『バラック』によれば, 板東収容捕虜が最初にスペイン風邪に発病した月日は, 11月9日で, 同月21日に患者数最大 (324人) となった. 26日以後は発病者は少なくなつた. 発病者累計は678人 (捕虜の2/3以上) であった. 富田 1991, pp.125-126, 203-207; 林 1993, pp.80-81.
- (注12) 林 1993, p.146.
- (注13) 以上, ドイツ牧舎とクラウスニツァーについては, 船本 1968, pp.3-5, 9-11, 13, 15-19 (クラウスニツァー); 鳴門市史 1982, pp.774, 1093-1096; 林 1982, pp.139-142; 富田製薬 1992, pp.87-94; 林 1993, pp.145-147 (クラウスニツェル); 棟田 1997, pp.134-135 (クラウスニツェル); ドイツ館 2000, pp.57-58; 瀬戸 2001, pp.69-70. なお, 棟田 1997 (pp.134-135, 353) は, ドイツ牧舎を「徳島県における近代的牧畜と酪農の発祥地」と評価するが, クラウスニツァーの階級を「予備工兵卒」と誤記しており, また, ドイツ牧舎と近くの久留島牧場とを混同している.
- (注14) クラウスニツァーの学歴については, 松尾 2002d, 第3節(2)を参照. ——ここで, 青島捕虜全体の学歴を見てみる. 教育程度一覧表 1920によれば, 青島捕虜中の下士官・兵卒の学歴は, 大学1.7%, 高等学校10.5%, 中学校13.8%, 高等小学校12.8%, 尋常小学校61.3%であった (オーストリア人捕虜を除く). 15年の「特殊技能者」, 440人 (おそらく全国の収容所の合計) の内訳では, 「学歴なきもの」258人 (59%), 「職工徒弟学校卒業のもの」151人 (34%), 「専門学校・大学卒業のもの」31人 (7%) であった. 鳴門市史 1982, p.740 (この「学歴なきもの」も, 松尾 2002d, 第3節(注5)で記したように, 義務教育 [ザクセン王国では8年間の通常国民学校と3年間の実業補習学校] は終了している, と考えられる). 個別の収容所で見ると, 松山に収容された捕虜, 合計415人のうち, 小

学校卒は170人、中学校卒以上は245人で、文盲はいなかった。才神 1969, p.134 (これによれば、全体の4割が小学校卒となる)。それに対して、松本清一は、板東収容捕虜のうち300人以上(つまり、板東収容者の3割以上)が「専門学校や大学以上の卒業生」であった(船本 1968, p.15)と述べている。しかし、この評価は過大であろう。

(注15) 船本 1968, pp.15-17.

(注16) 船本 1968, pp.18-19.

(注17) 船本 1968, p.19. 厩肥利用に関するクラウスニツァーの上記見解は『バラック』の一論説、「板野郡の行政・経済」の次の記述と関連するであろう。「注目すべきは、イタノ郡のような純田園地帯は、相当量の肥料を外部から移入しなければならないことである。1916年だけで、あらゆる種類の肥料543,860貫、価格にして125,554円が移入された。人糞肥料は阪神地方から船で運ばれる」。バラック 1998, p.41. さらに、富田 1991, p.186を参照。——船本宇太郎の回想では、「飼料についてドイツ人からいつも注意されたことは「牧草を作れ」という事でした。…何分周囲が麦作に県命(懸命)になっていた頃だったので、実行不可能と思つて上の空で聞き流し、又人にすすめてもおそらく「あほらしい事を云いなさんな」で終つたでしょう。然し自分一人でもやつてみるべきであつた」。船本 1968, pp.11-12.

(注18) 日本にあるクラウスニツァーの写真として、次のものがある。(a)鳴門市史 1982 (p.1094) の、ドイツ牧舎の牧場で乳牛と向き合った単独写真。(b)林 1993 (p.147) の、ドイツ牧舎前の3人の写真。右端が彼で、中央は船本宇太郎である(左端のドイツ人は不明)。(c)富田製薬 1992 (p.24) の、ドイツ牧舎前の集合写真。後列中央が彼であり、中列右端は富田久三郎である(氏名不詳のドイツ人が他に4人いる)。撮影時期は同書本文の記述から19年3月である。この写真は鳴門市史 1982 (p.1094) にも収められている。(d)富田製薬 1992 (p.90) の、ドイツ牧舎前の集合写真。その解説によれば、右端が彼で、中央白髪が富田久三郎、その右が松本清一、後列の鳥打ち帽が船本宇太郎である(氏名不詳のドイツ人が他に7人いる)。富田隆久氏のご教示によれば、クラウスニツァーの腕に抱かれているのが、富田登記子氏\*であり、松本清一の右が富田弘氏\*である。(e)林 1993 (p.150) の、富田家と捕虜の集合写真。写された人々の顔ぶれとその衣服から見て、これは、(d)と同じ日に同じ場所で撮影されたと考えられる。そうだとすると、中央が彼である。中列右端は富田久三郎、中列左端は松本清一であり、富田登記子氏はクラウスニツァーの腕に抱かれており、その右が富田弘氏である(他に氏名不詳のドイツ人が(d)と同じように7人いる)。(f)富田家所蔵の、1918年1月22日撮影、富田製薬工場見学記念と記された写真。富田隆久氏のご教示によれば、これの前列で椅子に座っている人は、右から富田介一\*、クラウスニツァー、「ストレー\*\*」、富田久三郎、松本清一であり、日本人の大人に抱かれている子供は、右から富田昌平氏\*、富田登記子氏、富田弘氏である。(g)吉田貞雄氏所蔵の、日本家屋の前に腰掛けた、クラウスニツァーと松本清一の写真。撮影時期は不明である。写真背景の家は、船本純郎氏のご教示によれば、ドイツ牧舎の隣の家(後の船本家住宅)である。

その他に、ドイツ牧舎前の集合写真が2枚ある。(h)鳴門市ドイツ館に展示されているドイツ牧舎完成記念写真(前列右から4人目は松本清一)。(i)富田製薬 1992 (p.89) にある、完成直後のドイツ牧舎前の集合写真。しかし、これら2枚においてクラウスニツァーは特定できない。

\* 富田介一(1897-1963)、富田弘(08年生まれ)、富田昌平(10年生まれ)、富田登記子(14年生まれ)の4氏は、富田久三郎の孫である。富田製薬 1992, pp.108, 343.

\*\*ストレーはオットー・シュトレ(Stolle)ではないであろうか。そうだとすると、彼は海兵第7中隊の下士官で、本籍地はオルデンブルク(Oldenburg)であった。俘虜名簿, p.58. オルデンブルクはオルデンブルク大公国の首都であった。Ritter 1906, S.458-459.

#### (4) クラウスニツァー帰国後のドイツ牧舎

クラウスニツァーが帰国した後、近隣の生乳生産者との競合を避けて、ドイツ牧舎は良質のバター製造に力点を置いた。このバターは市価より高い価格で大阪の間屋に販売され、富田製薬工場の薬品輸送船で出荷された。養豚においてはドイツ牧舎は良種の子豚の生産を中心にした。船本宇太郎はドイツ牧舎の経営をほとんど最初から担ってきた<sup>1)</sup>。船本宇太郎履歴書によれば、富田畜産部から船本三愛牧場への名義変更は54年であった。船本は、板東に隣接する板野郡堀江村(現・鳴門市)出身の賀川豊彦(1888-1960)と、信仰上の交流があった。ドイツ牧舎の2階は第二次大戦前後に賀

川の阿波農福福音学校に利用された<sup>(2)</sup>。ドイツ牧舎における乳牛の飼育は、船本純郎氏のご教示によれば、78年に至って停止された。

ところで、徳島県出身の日本薬学会会頭・長井長義（1845-1929）は、27年にドイツ製薬業界を視察した。長井視察団は日本を5月に出発し、米国経由で12月に帰国した。富田久三郎はこの視察団に同行し、上野周を通訳とした。上野周は長井の門下生で、薬学研究のために当時ドイツに留学していた。初めて外遊した久三郎は、視察団一行とともに精力的に諸工場を見学し、多くの大学・研究所・企業の研究室を訪問した。その合間に久三郎はクラウスニツァーの牧場を訪ねた。その牧場の所在地は明らかにされていない<sup>(3)</sup>。

第二次大戦後になって、旧板東収容捕虜と板東（鳴門）住民とが交流を拡大させていた68年に、船本宇太郎は次のように回想している。「富田鷹吉氏の親父久三郎翁が後年渡欧の際、ドイツのある大牧場にクラウスニツァー君を訪ねた処、大変喜んで俘虜当時のことを語りあい、又牧場主と共に広い牧場を案内してくれたとの事」であった。しかし、旧板東収容捕虜の対日交流の中心である「ライポルトさん」に照会してみても、「今七十幾才になっているはず」のクラウスニツァーの「消息がわからぬ<sup>(4)</sup>」。ここで船本は富田久三郎のあの訪問の期日と訪問先を記していないが、少なくとも期日は、長井視察団のドイツ滞在日程から考えて、27年6月から10月までのはずである。富田久三郎の訪欧は1回だけであるからである。

板東町「ドイツ牧舎」の創業期にドイツ式畜産・酪農技術を伝授したフランツ・クラウスニツァーについて、日本語文献で従来明らかにされていた事実は、ほぼ以上である。それでは、彼はどのような生涯を送ったのか。これが、松尾 2002 d の課題である。

(注1) 清涼飲料水「オアシス」の製造販売は34年に徳島県知事から松本清一に対して認可された。42年に同県知事宛て 飲用牛乳小売業の報告書を提出したのは、船本宇太郎であった。同事業の開始時期はこの報告書では20年5月とされている。富田製薬 1992, p.94.

(注2) 林 1982, pp.140-143. 最近になって、鳴門市ドイツ館の隣に賀川豊彦記念館が建設された。

(注3) 富田製薬 1992, pp.111-119. この視察旅行出発直前に長井長義は家族とともにドイツ牧舎を見学した。牧舎の煉瓦壁を背景とした記念写真は、富田製薬 1992, p.112にある。

(注4) 船本 1968, p.6. さらに、富田製薬 1992, pp.118-119を参照。——エドゥアルト・ライポルトは、板東収容所時代に数多くの写真を撮影し、アルバム帳に整理した。彼は帰国後、松尾 2002 a, 第4節で言及したフランクフルト「バンドー会」の世話人となった。旧捕虜で最初の手紙を62年に板東の役場に書き送った彼は、パウル・クライ（クーラー。板東収容捕虜最後の生存者）とともに、70年に板東を再訪した。72年に鳴門市ドイツ館が完成すると、ライポルトは上記のアルバム帳を寄贈した。最初に板東を再訪した元捕虜は、第二次大戦中に日本とドイツとを劇的に往復し、日本在住期間の長かったヨハネス・パールト（パールト, パート。ドイツ東アジア研究協会副会長）で、65年のことであった。林 1993, pp.156-158, 174-176, 178-179, 188-189; 棟田 1997, pp.340, 343-355; ドイツ館 2000, pp.80-81. さらに、瀬戸 1999, pp.118-119; 瀬戸 2001, pp.62-63, 94, 100を参照。クルト・マイスナーは、すでに大戦前からドイツの商社の駐在員として日本に滞在しており、日本語に堪能であった。彼は松山・板東収容所の講習会で日本語の講師を務め、『日本語日常会話講義（日常語教科書）』や『日本地理』を板東収容所印刷所から刊行した。解放後も日本に長く留まって、ドイツ東アジア研究協会の中心となり、『日本におけるドイツ人』などを出版した。晩年に帰国した彼は、ハンブルク・バンドー会を結成した。才神 1969, pp.146-147, 165; 鳴門市史 1982, pp.771-772; 富田 1991, pp.91-93; 林 1993, pp.106, 160; 棟田 1997, pp.71-72, 75-83, 106-107, 147-148, 163-164, 328-329, 344, 356; ドイツ館 2000, pp.40, 48, 72-75; 瀬戸 2001, p.104. エドゥアルト・ライポルトは砲兵第4中隊の一等砲兵で、本籍地はウンターラウター（Unterlauter）であった。俘虜名簿, p.36. ウンターラウターはザクセン・コーブルク・ゴータ公国の村であった。Ritter 1906, S.1119. ウンターラウターを合併したラ



ウタータール村役場を通じて届けられた、エドゥアルトの娘、リスベート・ライポルト夫人(コープルク市)の書簡によれば、ライポルトはウンターラウター村で生まれ、コープルク市で没した(1892-1978)。パウル・クライは海兵第2中隊の二等兵で、本籍地はヴァルタースハウゼン(Waltershausen)であった。俘虜名簿, p.31。これはザクセン・コープルク・ゴータ公国の都市である。Ritter 1906, S.1213。クライはヴァルタースハウゼンで生まれ、リュエデンシャイトで没した(1894-1992)。リュエデンシャイト市立文書館回答。松尾 2002 d, 第5節(注22)を参照。したがって、彼が「ポーランド国境に近いゴータの町」で生まれた、との説は誤りである。第1に出生地が正しくなく、第2にゴータ市はポーランド国境に近くないからである。ヨハネス・パルトは海兵第7中隊の二等兵で、本籍地は港湾都市プレーメンであった。俘虜名簿, p.6。パルトはプレーメンで生まれ、鎌倉(?)で没した(1891-1981), OAG Tokyo 回答。クルト・マイスナーは海兵第6中隊の二等兵で、本籍地はハンブルクであった。俘虜名簿, p.39。息ハンス氏(東京)の書簡によると、マイスナーはハンブルクで生まれ、スイスのロカルノで没した(1885-1976)。

### (5) 引用文献目録(松尾 2002d のそれを含む)

- Admirale 1988, 1989, 1990 = *Deutschlands Admirale 1849-1945*, hrsg. von H. H. Holdebrand und E. Henriot, Bd. 1 (1988), Bd. 2 (1989), Bd. 3 (1990), Osnabrück.
- Adressbuch 1918 = *Adressbuch für das Lager Bando 1917 / 8*, hrsg. von Rudolf Hülsenitz, Lagerdruckerei Bando.[鳴門市ドイツ館]
- Ehrenrangliste 1930 = *Ehrenrangliste der kaiserlich-deutschen Marine 1914-18*, hrsg. von A. Staelzel, Berlin.
- Fischer 1912 = Otto Fischer, *Das Verfassungs- und Verwaltungsrecht des Deutschen Reiches und des Königreiches Sachsen*, 13. Aufl., Leipzig.
- Gotha = *Gothaisches genealogisches Taschenbuch*, Briefadel, Freiherrliche Häuser, Gräfliche Häuser, Uradel.
- Heimatsadressen 1919 = *Heimatsadressen der Kriegsgefangenen im Lager Bando Japan*, Lagerdruckerei Bando.[鳴門市ドイツ館]
- Hofmann 1914 = H. L. Hofmann, *Die Rittergüter des Königreichs Sachsen*, 2. Aufl., Dresden.
- HOS 1957 = *Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen*, hrsg. von Karlheinz Blaschke, Leipzig.
- Jahrbuch 1912, 1915, 1923 = *Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich 1912, 1915, 1923*.
- Klein 1993 = Ulrike Klein, *Deutsche Kriegsgefangene in japanischem Gewahrsam 1914-1920. Ein Sonderfall*, Diss. Freiburg i. Br.
- Meyer 1916 (1), 1916 (2) = *Meyers Orts- und Verkehrs-Lexikon des Deutschen Reichs*, hrsg. von E. Uetrecht, 5. Aufl., 2 Bde., Leipzig / Wien.
- Namentliches Verzeichnis der deutschen und österreich-ungarischen Kriegsgefangenen in Japan*, verbessert und hrsg. vom Kaiserlich Japanischen Auskunfts-bureau über die Kriegsgefangenen, Tokio 1917 = 俘虜名簿 1917 を見よ。
- Ritter 1905, 1906 = *Ritters geographisch-statistisches Lexikon über die Erdteile, Länder usw.*, 9. Aufl., hrsg. von Johannes Penzler, 2 Bde., Leipzig.
- Schlesinger 1965 = Walter Schlesinger, *Sachsen*, Stuttgart. (*Handbuch der historischen Stätten Deutschlands*, Bd. 8)
- Schöne 1925 = Schöne (Hrsg.), *Die Sächsische Landwirtschaft, ihre Entwicklung bis zum Jahre 1925 sowie Einrichtungen und Tätigkeit des Landeskulturrats Sachsen zu Dresden*, Dresden.
- Seydewitz 1890 = Paul von Seydewitz, *Codex des im Königreiche Sachsen geltenden Kirchen- und Schulrechts*, 3. Aufl., Leipzig.
- 沿革史 1920 = (板西警察分署) 警備警察官出張所・編, 『板東俘虜収容所沿革史』。(この編纂時期は明記されていないが、20年の収容所閉鎖まで記録されている) [鳴門市ドイツ館]
- 小幡公使 1919 = 「在本邦俘虜ノ家族送還ニ關シ小幡公使ヨリ稟申ノ件」, 『俘虜関係雑纂10』, 第24。
- 教育程度一覽表 1920 = 「俘虜學識程度一覽表」, 『俘虜ニ關スル書類(1)』, 附表第15號。
- 久留米収容所 1999 = 久留米市教育委員会・編, 『久留米俘虜収容所 1914-1920』(久留米市文化財調査報告書第153集)。
- 故国住所録(板東収容所俘虜故国住所録, 板東収容所俘虜の故国での住所, 収容所仲間の故国でのアドレス一覽表) = *Heimatsadressen 1919* を見よ。
- 才神 1969 = 才神時雄, 『松山収容所』, 中央公論社。
- 瀬戸 1995, 1999, 2000, 2001 = 瀬戸武彦, 「青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本」, (1), (2), (3), (4), 『高知大学学

- 術研究報告 人文科学], 44巻, 48巻, 49巻, 50巻.
- 『戦時書類』=『戦時書類 自大正三年至九年』, 58巻. [防衛庁防衛研究所図書館(海軍省/日独戦書/T 3-55/512)]
- ドイツ館 2000=鳴門市ドイツ館史料研究会,『どこにしようと,そこがドイツだ——板東俘虜収容所入門』,鳴門市.
- 徳島市医師会史 1994=『徳島市医師会史 85年のあゆみ』,徳島市医師会.
- 特種技能俘虜 1918=『俘虜ニ關スル書類(1)』,附表第19號,「俘虜職業調査表」中の「俘虜特種技能者調」(板東収容所の項).
- 富田 1991=富田弘,『板東俘虜収容所』,法政大学出版局.
- 富田製菓 1992=『富田製菓百年のあゆみ』,富田製菓(株).
- 鳴門教育大学 1990=鳴門教育大学社会系教育講座・芸術系教育講座(音楽),『「板東俘虜収容所」研究』(昭和62・63年度文部省特定研究報告書).
- 鳴門市史 1982=『鳴門市史』,中巻,鳴門市.
- 日本居住許可俘虜 1920=「日本領土内居住及旅行等ヲ許可シタル俘虜解放ニ關スル件」,『俘虜ニ關スル書類(2)』,第29.
- 林 1982=バーディック(Charles B. Burdick)・メースナー(Ursula Mößner)・林啓介,『板東ドイツ人捕虜物語』,海鳴社.
- 林 1993=林啓介,『「第九」の里 ドイツ村』,井上書房.
- バラッケ 1998=『ディ・バラッケ』,第1巻,鳴門市ドイツ館.
- 板東収容所俘虜故国住所録(収容所仲間の故国での住所,収容所仲間の故国でのアドレス一覧表)=Heimatsadressen 1919を見よ.
- 『板東俘虜収容所案内記(書)』=Adressbuch 1918を見よ.
- 船本 1968=船本宇太郎・松本清一,『ドイツ俘虜の家畜管理と酪農の草分時代について』,三愛酪農部.[鳴門市ドイツ館]
- 船本宇太郎履歴書.[鳴門市ドイツ館]
- 『俘虜関係雑纂1,10』=『外務省 日独戦争ノ際俘虜情報局設置並独国俘虜関係雑纂』,1巻,10巻.[外務省外交史料館(5/2/8/38)]
- 俘虜職業調 1915, 1917=「俘虜情報局 俘虜職業調(大正四年,大正六年)」,『戦時書類』.
- 『俘虜ニ關スル書類(1)』=『陸軍省 大正三年乃至九年戦役俘虜ニ關スル書類(俘虜取扱頭末)』.[防衛庁防衛研究所図書館(陸軍省/日独戦役/T 3-5/38)]
- 『俘虜ニ關スル書類(2)』=『陸軍省 俘虜ニ關スル書類 自大正三年至九年』.[防衛庁防衛研究所図書館(陸軍省/日独戦役/T 3-18/51)]
- 俘虜名簿 1917=「日本帝国俘虜情報局 獨逸及埃洪國俘虜名簿 大正六年六月改訂」,『俘虜関係雑纂1』および『戦時書類』.
- 俘虜労役表 1918=「各俘虜収容所ニ於ケル所外勞役,所内勞役其他經費節約ノ為採リタル處置及慰安(俘虜ノ心身ヲ活動セシメ取締ニ資スル目的ヲ以テ)」,『俘虜ニ關スル書類(1)』,第一章第四節第三款,「各俘虜収容所ニ於ケル取締ノ状況」(板東収容所の項).
- 俘虜労賃表 1920=「俘虜労賃金並延人員表」,『俘虜ニ關スル書類(1)』,附表第18號.
- ベアー 1979=ベアー(Karl Baehr)(詩)・ムッテルゼー(Wilhelm Muttelsee)(画)(林啓介・編訳),『鉄条網の中の四年半——板東俘虜収容所詩画集』,南海ブックス.
- 松尾 1998a=松尾展成,「來日したザクセン関係者」,『岡山大学経済学会雑誌』,30巻1号.
- 松尾 2002a=松尾展成,「日独戦争,青島捕虜と板東俘虜収容所」,『岡山大学経済学会雑誌』,34巻2号.
- 松尾 2002b=松尾展成,「ザクセン王国出身の青島捕虜」,『岡山大学経済学会雑誌』,34巻2号.
- 松尾 2002c=松尾展成,「日本語文献から見た「ドイツ牧舎」(徳島板東)指導者クラウスニツァー」,『岡山大学経済学会雑誌』,34巻3号.
- 松尾 2002d=松尾展成,「「ドイツ牧舎」(徳島板東)指導者クラウスニツァーの生涯」,『岡山大学経済学会雑誌』,34巻3号.
- 丸亀収容所日誌=「丸亀俘虜収容所 日誌 大正三年十一月十四日起」,『陸軍省 各俘虜収容所事務報告綴 大正六年』.[防衛庁防衛研究所図書館(陸軍省/雑/T 6-3/47)]
- 棟田 1997=棟田博,『日本人とドイツ人——人間マツェと板東俘虜誌』,光人社.

## **Franz Claußnitzer in dem Kriegsgefangenenlager Bandou (Japan) als Leiter des “Deutschen Viehstalls” aufgrund japanischer Literatur**

Nobushige Matsuo

- (1) Berufliche Zusammensetzung der 1914 zu Tsingtau gefangenen deutschen Soldaten
- (2) Errichtung des “Deutschen Viehstalls” zu Bandou 1917
- (3) Leiter des “Deutschen Viehstalls” Franz Claußnitzer 1917 – 1919
- (4) Der “Deutsche Viehstall” nach der Heimkehr F. Claußnitzers
- (5) Literatur